

〔萬葉集略解十四〕あしがらを舟は、足柄山の杉もて造る船也、相模の足柄郡と伊豆國は、山續きて分ちがたき故に、伊豆手船足柄を船も異ならぬなるべし。

〔和漢船用集四〕舟名數海船。房州立船。攝州、紀州、泉州に多し、東國房州へ干鯛を積に行く舟なる故かく云、房州よりも積來る、表の垣立取置にするもの也。

〔夫木和歌抄三十三〕あさつまふね略中

日吉社にたてまつりける五十首初春歌

家長朝臣

にほのうみやあさづま舟も出にけりつなくこほりを風やとくらん

〔近世奇跡考五〕朝妻船讚考

朝妻船賛 隆達がやぶれ菅笠しめ緒のかつらながく

傳りぬ、是から見れば、あふみのや、

あだしあだ波よせてはかへる浪朝妻船の淺ましや嗚呼またの日は、たれに契りをかはして色を、枕はづかし、偽がちなる我とこの山よし夫とても世の中、

北窓翁一蝶畫讚□○

今柳塘館所藏の正筆を以てうつし出す、

〔和漢船用集四〕舟名數海船。雜賀。此字を用る時は、紀州の名所を呼者、信長記に、雜賀兵船、其外谷輪

浦々の舟と見えたり、又サヤマキとも云、

〔萬葉集六〕雜歌。過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

島隱、吾榜來者、乏、倭邊上眞熊野之船、

〔萬葉集十二〕古、今、相聞往來歌、羈旅發思、

浦回榜能野舟泊目頼志久懸不思月毛日毛無、